

# 生活と生業の変化から見た 漁業集落の景観変遷

金子由愛<sup>1</sup>・平野勝也<sup>2</sup>

<sup>1</sup>学生会員 東北大学大学院工学研究科土木工学専攻 博士課程前期2年  
(〒980-8572 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 468-1, E-mail:kaneko.yui.s2@dc.tohoku.ac.jp)

<sup>2</sup>正会員 博士(工学) 東北大学 災害科学国際研究所 准教授  
(〒980-8572 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉468-1, E-mail:hirano@tohoku.ac.jp)

近年、日本の漁業集落における「漁業集落らしさ」は希薄になっている。この体感を客観的に示し、漁業集落らしさが失われた要因を明らかにすることは、今後の漁業集落の在り方を考える上で重要である。本論文は記号論を用いて、漁業集落の景観の変遷を分析することで、漁業集落らしさが失われた要因となる生活と生業の変化を明らかにすることを目的とした。写真サンプリングを用いた通史的な分析から、特に昭和50年代の機械化や漁港整備などを背景とした生活と生業の変化が要因であることが考察された。景観に表出する生活や生業が変化している可能性が示された以上、従来の漁業集落らしさから、新たな漁業集落らしさに理想像を切り替えて漁業集落の在り方を考える必要があるのではないかと。

**キーワード:** 漁業集落, 文化的景観, 記号論

## 1. はじめに

### (1) 研究背景

日本は四方を海に囲まれた島国であり、沿岸には数多くの漁業集落が密集している。背後に崖や山が迫る狭隘な土地にあるものが6割近くあり<sup>1)</sup>、多くの漁業集落は立地の不便さや自然災害に対しての脆弱性に向き合いながらも、生業と生活によって独特の景観を維持してきた。

しかし、東日本大震災で被災した漁業集落では、高台移転した土地にモデル住宅が立ち並ぶ地区や、防潮堤や災害危険区域を設けたことで職住分離が進んだ地区などが多く生じ、いまや漁業集落らしさが感じられない。これらのことから、漁業集落らしさが失われたのは、東日本大震災の復興が契機となっているように思える。

だが、漁業集落らしさが希薄化している現状を抱えるのは被災地だけではない。実際に全国の漁業集落を見ても、漁業集落らしさが残っているのは観光地としてそれらを売りにしている場所の他ほとんど見られない。

ここで、文化財保護法における「文化的景観」の定義によれば、景観が生活と生業の表出であることを示唆している。故に文化的景観の一種である「漁業集落らしさ」とは、漁業集落特有の生活と生業が表出した景観と捉えられる。これを参考にすると、漁業集落らしさが失われた要因の一つは生活と生業の変化にあると考えられ、こ

れは被災地に限った変化ではなく普遍的な動きであるため、全国的に漁業集落らしさが失われつつある現状を生んでいると考える。それゆえ、漁業集落らしさが失われた要因を生活と生業の変化の観点から明らかにすることは、今後の漁業集落の在り方を考える上で重要である。

しかし、漁業集落の景観変遷に関する既往研究は非常に少ない。林ら<sup>2)</sup>は、淡路島の伝統的な漁村における住民の生活様式が景観にどのように影響しているかを分析しているが、景観の変遷については言及していない。

### (2) 研究の目的

したがって本研究では、漁業集落の景観の変遷を分析することで、漁業集落らしさが失われた要因となる生活と生業の変化を明らかにすることを目的とする。

なお、漁業集落らしさには、生活と生業の表出の他にも、例えば集落道や浜などのデザインにより表出する漁村集落らしさ等が考えられるが、本研究では生活と生業の表出にのみ着目する。

## 2. 研究方法

### (1) 研究の枠組み

生活や生業の変化は時代とともに変化してきた動きであるため、景観の変遷の通史的な分析が必要となる。よ

って本研究では比較的長期間記録されている、写真資料を収集して分析を行う。その際、写真を介して生活と生業の変化を読み取るための手法として、視覚的情報を体系的に取り扱うことができる記号論を用いる。

ここで、サンプリングの理想は、定点かつ通時的変化を収めた漁業集落の写真を複数箇所分入手できることであるが、現実には難しい。そのため、時代・場所共に不特定な写真を収集する。故に、地域によって撮影された景観に偏りがあることや、撮影者の好みによって被写体に差が生じることなどの問題が起り得る。そこで、可能な限り多くの写真を入手することで、こうした問題点による影響を小さくできるものとする。以上より本研究のサンプリング写真は、以下の2点の仮定に基づいて分析できるものとする。

- ・撮影場所による被写体の偏りはないものとする
- ・撮影者の意図は、時代や掲載コンテンツによる偏りはなく、普遍的なものとする。

以上の仮定を置くことで、記号論に基づいた以下の分析Ⅰ、Ⅱが可能となる。なお記号論において「被写体」は「記号」として扱う。

分析Ⅰ：前者の仮定より、建物外での記号の数量的変化は、時代の変化にのみ拠るものとする。ここで、記号の数量的変化は、写真同士で比較する為に「建物あたりの記号密度」と基準化する。これにより建物あたりの記号密度変化に表れる生活や生業の変化を概括的に把握することができる。

分析Ⅱ：後者の仮定より、漁業集落内での人の作業や水産物の数量的変化は、時代の変化にのみ拠るものとする。ここで、人の作業や水産物の数量的変化は、写真同士で比較する為に「時代区分ごとの写真総数に対する人の作業や水産物の割合」と基準化する。これにより写真の総数に対する人の作業や水産物の割合変化に表れる生活や生業の変化を概括的に把握することができる。

## (2) 分析方法

### a) サンプリング方法

漁業集落における景観の変遷を見るのに十分な期間として、1955年～2004年(昭和30年～平成16年)の漁業集落の写真を可能な限り入手した<sup>3)～9)</sup>。なお本研究では写真ごとの場所的特性を極力無視し、同時代の普遍的な特徴を掴むために、漁業集落を客観的な指標で分類し、それらの偏りがないようにサンプリングを行う必要があった。そのため、漁業集落は水産庁が定める漁港種別(第一種・第二種・第三種・第四種・特定第三種漁港)<sup>10)</sup>により分類、漁港を特定できない集落の

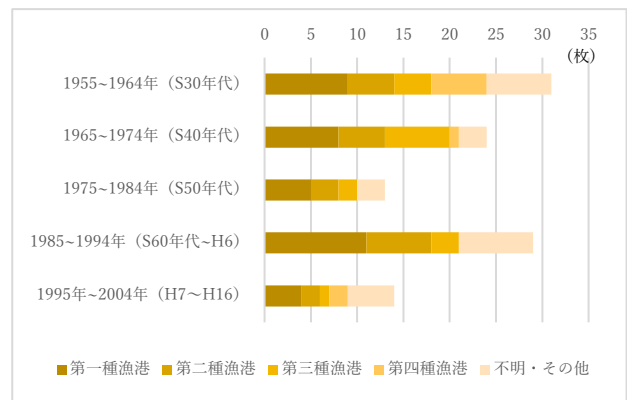


図-1 サンプリング写真の属性

写真については「その他」とし、サンプルの偏りにより分析に支障が出ないように十分注意した。

サンプリングした写真の、漁港種別ごとの枚数は図-1に示す通りである。属性の割合から、漁港種別による偏りはないものと判断した。

### b) 時代区分

昭和30年代から昭和50年代までは和暦10年ごとに区分し、それ以降も階級を統一するため年代を10年ごとに区分している。

### c) 写真抽出と記号分類方法

(1)で述べた分析Ⅰ、Ⅱを行うために適切な写真抽出と記号分類を行った。

分析Ⅰ、すなわち建物一軒あたりの建物外の記号密度変化分析を行うために、町並みが写っている写真(図-2)を抽出し、以下4種の記号分類に従って集計した。

- ・水産 直接記号
- ・水産 婉曲記号
- ・暮らし一般 直接記号
- ・暮らし一般 婉曲記号

分析Ⅱ、すなわち写真の総数における人の作業や水産物の割合変化分析を行うために、水産業に関連する人の作業が主景の写真(図-3)と水産物が主景の写真(図-4)を抽出し、集計した。

ただし、上記の分析に必要な写真のうち複数に該当する場合は、同じ写真を該当するすべての分析に使用した。

なお「直接記号」や「婉曲記号」は平野<sup>11)</sup>の街並みメッセージ論から援用しており、本研究では直接記号とは人の行為、婉曲記号とは人の行為を想起する物とする。また水産記号とは、国語辞典<sup>12)</sup>における定義【水産業：水産生物の漁獲・採集・養殖、冷蔵・冷凍・加工、市場・輸送・販売の各分野に関わる産業】に含まれるいずれかに関連する要素とした。また分析Ⅱのために抽出した、水産業に関連する人

の作業が主景の写真は【水産業】の行為のうち、建物内でも可能な行為であるにも関わらず、建物外で行っている様子が写っている写真を選択基準とした。具体的には、以下の通りである。

- ・漁獲・採集・養殖のうち、漁具の修理・手入れなどの準備行為
- ・冷蔵・冷凍・加工のすべて
- ・市場・輸送・販売のうち、販売に関する行為

また「暮らし一般」記号とは、総務省統計局<sup>13)</sup>が示す生活行動16種のうち、仕事を除く活動を示唆する要素とした(仕事は「水産」に含める為)。



図2 町並みが写っている写真  
引用：南あわじ市，掲載許可受領済



図3 水産物に関連する人の作業が主景の写真  
出典：社団法人全国漁港漁場協会発行「漁港」(2003年45巻第3・4合併号)，掲載許可受領済



図4 水産物が主景の写真  
出典：社団法人全国漁港漁場協会発行「漁港」(2004年46巻第2号)，掲載許可受領済

### 3. 結果と考察

以上の分析から生活や生業の変化を考察するため、結果においても変化に着目する。(1)では分析結果から見られる全体の変化の傾向各変化を述べ。(2)では各記号変化に着目した考察をした上で、文献調査から読み取れる社会的・漁業史的背景を論拠に解釈を加える。

#### (1) 分析結果から見られる全体の変化の傾向

分析Ⅰ，すなわち建物一軒あたりの建物外の記号密度変化分析の結果は図5～図8に示す通りである。グラフでは各年代の写真群の平均値を示し、ひげは記号密度(個/軒)が平均値+SD(標準偏差)の間にあることを意味する。また分析Ⅱ，すなわち写真の総数における人の作業や水産物の割合変化分析結果は図9，図10に示す通りである。直接記号は水産・暮らし一般ともに顕著な傾向はみられなかったが、婉曲記号は水産・暮らし一般ともに全体として減少傾向が見られた。また、人の作業や水産物の割合においても全体的に減少傾向が見られた。

いずれの分析からも、水産業に関連する記号が全体として減少傾向にあるため、そうした記号の表出のもととなる漁業集落の生活と生業が減少していることが分かる。さらに、漁業集落特有の生活と生業が表出した景観が漁業集落らしさと捉えているので、漁業集落らしさが失われたという体感とも一致する。

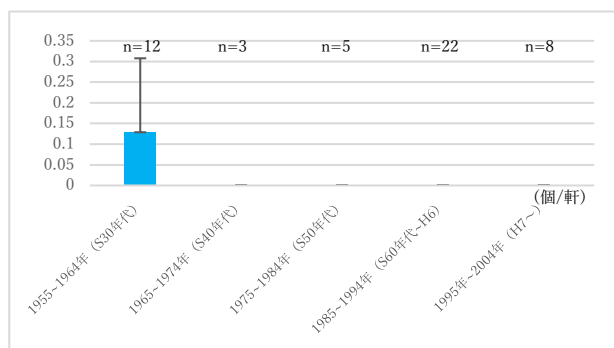


図5 水産直接記号の平均密度変化  
ひげは記号密度(個/軒)が平均値+SD(標準偏差)の間にあることを意味する。以下図6,7,8も同様。

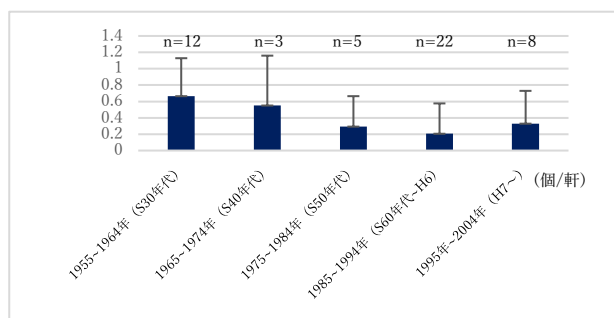


図6 水産婉曲記号の平均密度変化

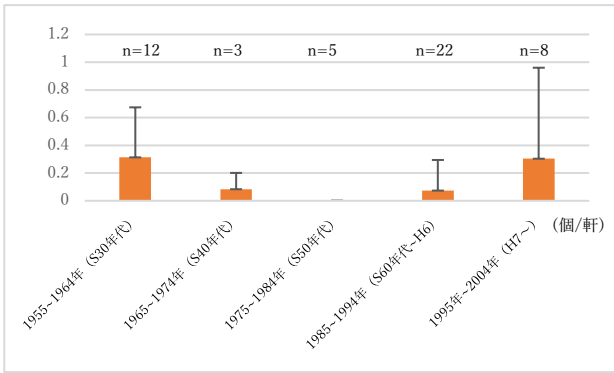


図-7 暮らし一般直接記号の平均密度変化

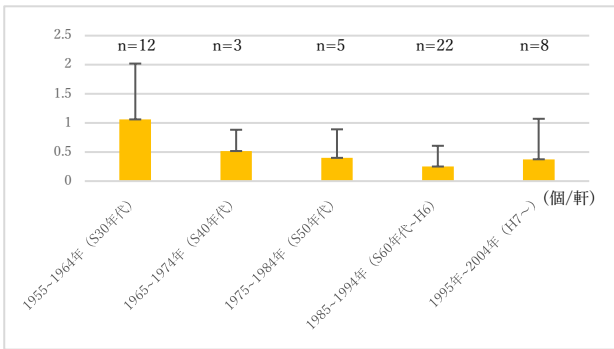


図-8 暮らし一般婉曲記号の平均密度変化

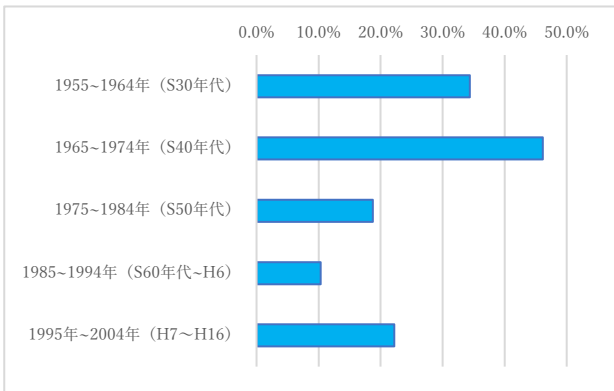


図-9 水産業に関連する人の作業が主景の写真の割合変化

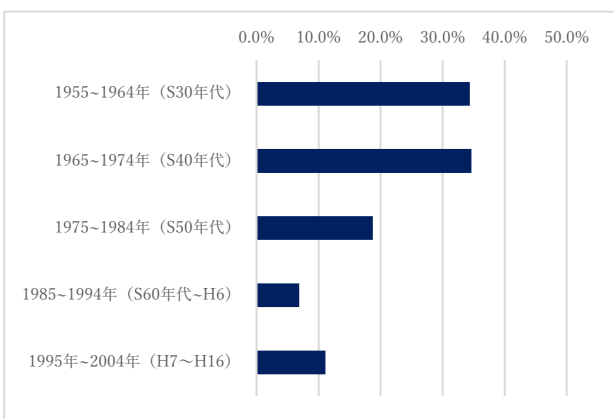


図-10 水産物が主景の写真の割合変化

## (2) 具体的な記号変化に着目した考察と解釈

つぎに、写真から読み取れた記号の具体的な変化に着目する。その基となる生活と生業の変化の要因を考察し、さらに文献にある社会的・漁業史的背景を論拠に解釈を加える。

### a) 加工関連の水産記号の減少

第一に、剥く・干す・乾かすといった加工に関連する水産記号が減少していた。この背景には、加工作業が自動化・機械化して建物内に収まっていったことが考えられる。海苔の製造過程を例にとると、抄き・脱水・乾燥・剥ぎまでの一連の工程を1台でこなす「全自動のり乾燥機」が昭和52年頃から登場したとある<sup>14)</sup>。

### b) その他の水産記号の減少

第二に、外で魚を捌く・解体する、浜で漁具を修理する、家の外や浜に置かれている漁具などの水産記号が減少していた。この背景には、荷さばき所や漁具・漁船の修理場、漁具倉庫などのあらゆる用途を含む「漁港施設」の修築・整備が進み、水産業関連の行為・物が漁港施設内で一括に管理されるようになったことが要因と考えられる。実際に、昭和25年に制定された「漁港法」第三条で定義される「漁港施設」において、「漁船修理場及び漁具保管修理施設」や「荷さばき所」を含む多くの施設が含まれていることから、昭和25年以降は、それまで建物外で行われてきた作業・建物外に置いていた物も、漁港施設内で管理することを基本にしたと解釈できる。実際に、平内町漁業協同組合(昭和45年発足)では、昭和49年の“第1次”事業計画にて既に「漁具倉庫」の設置を組み込んでおり、その後昭和51年に三回増築している<sup>15)</sup>。

### c) 暮らし一般婉曲記号の減少

第三に、浜で洗濯物が干されている風景、すなわち水産記号が主となる場での暮らし一般記号が減少していた。この背景には、暮らし一般の場が自宅に限らず浜などの共用空間にまで溢れ出していた時代から、水産記号は漁港施設に、暮らし一般記号は自宅敷地内にといったように特定の場所に記号が集約化せざるを得なくなり、それによって水産記号が主となる場での暮らし一般記号が減少したことが要因であると考えられる。萩原<sup>16)</sup>より、昭和50年代前半からの漁業集落の空間整備の基本的な考え方は、漁港(水産空間)と集落(暮らし一般空間)を分離するものであり、それぞれに特化した適切な事業整備がなされていったことが分かる。こうした背景により、暮らし一般記号のうち水産記号が主となる場でのそれが減少し、総数が減少したと解釈できる。実際に、新潟県能生町能生でも昭和47年に浜沿いに国道8号線のバイパスが開通し、テトラポッドが敷き詰められて実質的に浜が消失した後の写真で

は、水産作業風景や記号は確認できなかった<sup>9)</sup>。

## 5. まとめと展望

本論文は「漁業集落らしさ」を漁業集落特有の「生活と生業が表出した景観」と捉え、記号論を用いて漁業集落の景観の変遷を分析することで、漁業集落らしさが失われた要因となる生活と生業の変化を明らかにすることを目的とした。これを達成する為に、1955年～2004年(昭和30年～平成16年)のサンプリング写真から水産関連記号と暮らし一般記号を観測し、集計して2種類の分析を行った。その結果、水産関連記号と暮らし一般記号のいずれも大まかな減少傾向が見られた。その背景としては、加工作業が自動化・機械化したこと、漁港施設の修築・整備により水産業関連の行為・物が漁港施設内で一括に管理されるようになったこと、さらに漁港施設や自宅の敷地内など特定の場所に生活と生業が集約化したこと、などの生活や生業の変化が考察できる。

以上を踏まえ、今後の漁業集落の姿について推察する。外力により戻すことが難しい生活や生業の変化によって漁村集落らしさが失われたという見方ができた以上、これまでの漁業集落らしさを取り戻すことは難しいと考える。したがって、今後の漁村集落については新たな漁業集落らしさを模索する必要があるだろう。

今後は写真のサンプル数を増やして分析を行うこと、また分析結果の背景となる論拠を深めることで、より説得力のある論説にすることが課題である。さらに、同じ集落でも農業集落は伝統的な景観が生活や生業と共に受け継がれている場所が多いことから、農業集落についても同様の分析を行い、漁業集落との差異を見出すことも課題とする。

**謝辞：**本研究の資料調査において神奈川県日本常民文化研究所特別研究員の小野寺佑紀氏、大島漁協文庫の会、大島公民館、神奈川県日本常民文化研究所、水上忠夫氏には多大なご協力を頂いた。厚く謝意を表する。

## 参考文献

- 1) 水産庁：漁村の現状と役割、  
[https://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h29\\_h/trend/1/t1\\_2\\_5\\_1.html](https://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h29_h/trend/1/t1_2_5_1.html), 最終閲覧日 8月26日。
- 2) 林ひろみ、林まゆみ：淡路市岩屋地区における漁業集落の特徴的な景観とその特性について、ランドスケープ研究, Vol. 75, No. 5, pp.667-672, 2012.
- 3) 須藤功：漁村と島, 社団法人 農山漁村文化協会, 2004.
- 4) 社団法人全国漁港漁場協会：漁港 (Vol. 25, No.3, 1983-Vol. 46, No. 4, 2004) .
- 5) 社団法人全国漁港漁場協会：漁港四十年史, 1988.
- 6) 香川県漁業史編さん協議会：香川県漁業史 資料編, 1994.
- 7) 香川県漁業史編さん協議会：香川県漁業史 通史編, 1994.
- 8) 新潟県水産海洋研究所：創立百周年記念誌, 1999.
- 9) 大洋漁業 80年史編纂委員会：大洋漁業 80年史, 1960.
- 10) 水産庁：漁港一覧,  
[https://www.jfa.maff.go.jp/j/gyoko\\_gyozoyo/g\\_zyoho\\_bako/gyoko\\_itiran/sub81.html](https://www.jfa.maff.go.jp/j/gyoko_gyozoyo/g_zyoho_bako/gyoko_itiran/sub81.html), 最終閲覧日 8月26日。
- 11) 平野勝也：街並みメッセージ論とその商業地街路への適用, 東京大学学位論文, 1999.
- 12) 小学館 デジタル大辞泉：水産業,  
<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E6%B0%B4%E7%94%A3%E6%A5%AD/>, 最終閲覧日 8月26日。
- 13) 総務省統計局：平成13年社会生活基本調査 生活行動の種類と内容例示,  
<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2001/kodobua.html>, 最終閲覧日 8月26日。
- 14) 海苔で健康推進委員会：海苔が出来るまで,  
<https://www.nori-japan.com/lecture/process/>, 最終閲覧日 8月26日。
- 15) 平内町漁業協同組合：沿革,  
<http://amhiranaigyokyo.jf-net.ne.jp/about/about/>, 最終閲覧日 8月26日。
- 16) 萩原 拓也：津波常習地域の漁業集落における空間整備事業の計画と実態, 都市計画論文集, Vol. 57, No. 1, p. 240-254, 2022.